正義の独裁者～異世界人による国政～

英田　清光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正義の独裁者～異世界人による国政～

【Ｎコード】
Ｎ７８０４Ｘ

【作者名】
英田　清光

【あらすじ】
長らく続いてきた「悪の独裁政権」が崩壊したばかりの国で、異世界から召喚された主人公達が「正義の独裁政権」を名乗って好き勝手やらかす話。文化や考え方の違いに四苦八苦したり、騙されたりしながらも、一部の親切な人達に支えられ国家の安寧を目指します。
山あり谷あり、最後はハッピーエンド（の予定）。
――――――――子供が少ない知識で執筆しておりますので話の作りは浅いかと存じます。また、残酷な表現や人間の汚い部分も多少

出できますので苦手な方は注意してください。

1―1「召喚」（前書き）

初めまして、英田清光と申します。
処女作なので書き慣れてない感が否めないですが、よければ感想などお聞かせ願います。

1―1「召喚」

「どうにか、しなければ……」

海に面したどこかの浜辺で、一人の男が倒れていた。辺りは真っ暗で、裏には深い深い森が広がっている。一見すると無人島にでも流れ着いたかのような状況で、男は口の端を曲げて小さく呟いた。

「禁忌の術、か……。こんな致命的な状況で今更どんな罰が下ろうと同じだっ」

男が両手両足に力を込めると、その体を明るい光が包み込み、まるで重力に逆らうよう宙に浮いた。――

ドーンッ……

遠くで大きな破裂音が響くのが分かった。それと同時に、さっきまで穏やかだった光が段々と禍々(まがまが)しいオーラに変容していく。

男は目を細めると、一言呟き、静かに目を閉じた。

「……後は頼んだぞ、勇者」

◆◆◆

「アラブの春ぅ？」

馬鹿にしたような怪訝な声が賑やかな店内に響き、瞬時に他の音に掻き消される。ここは某ハンバーガー店、二階窓際の一角だ。

「何それ」

言葉を返しつつも、興味無さ気にポテトを口に放り込んだのは篠澤（しのさわ）　桂磨（けいま）。無愛想で捻くれ者の高校ニ年生。

「おっまえ、頭良いのにニュースとか見てないのかよっ」

ハンバーガーを大口で頬張り、唾を飛ばしながら声を上げているのは霧力（きりき）　英和（ひでより）。桂磨の高校のクラスメイトで自称親友。桂磨が鬱陶しがっていることに気付かないぐらいには鈍感、……が、何故かモテる。

「……簡単に言うと、アフリカで政府に対してデモが起こったりしてることだ。エジプトとか……、最近じゃリビアのガダフィが捕まったとか報道されてただろ？」

うざったらしく語尾を上げて自慢気に胸を張る英和の言葉を何となく聞き流していた桂磨が、ジュースをズズッと啜（すす）ってからゆっくりと訂正した。

「カダフィだよ、馬鹿。それにカダフィ大佐は捕まっていない」

ついでに付け加えると、アラブの春はその名の通り「アラブ世界」を中心として起こっているのであって、「アフリカ」で起こっている訳ではないのだが、そこは別に良い、そう大して変わることじゃない。

「んなコマケーこたぁ知らん。俺が言いたいのはだな、独裁者が次々に終わってるって事実！　やっぱ好き放題してたらいつか痛い目に遭うってことだなー、うん」

一人で勝手に納得した英和は最後にニパッと笑うと、ポテトを箱ごと持ち上げて大きく開けた口の中に流し込んだ。まったく、こいつを好きな女子の気持ちが益々分からない。それと、その滅茶苦茶な文法をどうにかしてほしい。

桂磨は大きく息を吸って態と溜息をついてみせてから言った。面倒臭いなー、こいつの国語の成績って2だったっけ……。

「というか、独裁政治が悪い訳じゃないでしょ。馬鹿が何人も集まってグダグダな政治するなら、頭の良い人が一人で要領良く治めた方が国は安定する。それに、政治の仕組みはそう簡単に変わるものじゃない。何せ次に国を治める人は、前のグダグダだった政治を見て育ってるんだよ？　比較的似たり寄ったりな政治でまた国民から不平不満が出るか、逆に前とは違うことをしなきゃって念に駆られて自滅するか……」

英和はさっきまでの自信満々な笑みを強張らせ、言い返せない様だ。それを光のない眼で一瞥した桂磨は眼鏡のフレームをクイっと持ち上げ、続けた。

「どっかのジャーナリストも言ってたよ、革命やら何やらで一度崩れた政治を立て直すには、相当の時間と才能が要る、ってさ」

「……そうか」

一言だった。――その後英和が発せた言葉はその一言だけだった。

もう既に食べ終わったハンバーガーとポテトの箱に目を落として、ジュースをテーブルに置いたままストローだけ加えて啜っている英和と、何事も無かったかの様にちびちびとハンバーガーを齧りながら携帯を弄り出した桂磨。先にその空気に耐えられなくなったのはどちらでもない、今までテーブルの隅で空気と化していた一人の少女だった。――

「そ、そういえば、リナ先輩彼氏出来たらしいですねー？」

「……」

「……さあ」

前者が桂磨で、後者が英和だ。

「「「……」」」

……彼女としては気を利かして無理矢理世間話に切り換えようとした自分の発言が、更に無言の壁を高めようとは思ってもみなかったであろう。

彼女の名は篠澤（しのさわ）　真紀之（まきの）、桂磨の妹である。中学三年生。

ちなみにリナ先輩とは真紀之の所属する部活のＯＧで、桂磨達の中学時の同期生である。今は違う高校に通っているため二人が彼女の情報を知っているとは真紀之も思っていないが、それでももう少し話を盛り上げる努力をしてくれても良いんじゃないだろうか。特に曲がり形（なり）にも自分の兄である桂磨が無視なのは殴ってやりたいとさえ思う。

「よしっ、そろそろ帰ろうか」

妹よりも時間が掛かって漸（ようや）くハンバーガーを食べ終えた桂磨が、飲み干したジュースのカップを押し潰しながら席を立った。二人の返事を待たずに早速学生鞄を肩に掛けている。

二人は思った、……自分勝手にも程があるだろう、と。しかしそれを口に出さないのは言っても何も変わらないことを今迄に何十回と経験しているからだ。それに、二人はもうとっくに食べ終わっていて、そろそろ帰りたいなと思っていた頃合だ。

桂磨は昔から、そういうとこだけは良く気が回るのだ。もしかしたら彼は、二人が帰りたくなる頃を見計らって食を進めているのではないかと英和は思った。

二人は特に異存も意見もなく、トレーを持って立ち上がった。

◆◆◆

「でね、ユズがクラスの男子格付けしよー、何て言い出しちゃってー」

「マジかよっ。女ってこえぇぇ……」

「そうゆーの好きなのは一部の女子だけですよお！　私も流石に嫌だったんでHR終わって直ぐ逃げ帰って来たんです」

ここは閑静な住宅街沿いに在る割と広めの公園。木々が仄か色づき始める季節だ。この公園を抜ければ駅前に出る。辺りは暗く、小さく足下を照らす外灯だけが頼りだ。

喋っているのは英和と真紀之の二名。残りの一名は、二人の後ろを黙って携帯を弄りながら歩いており、時折発せられる眠そうな欠伸だけが彼の存在を知らせてくれる。

それにしても先程から携帯で何をしているのだろうか。ゲーム？　メール？　そう言えば自分の周りのことを無差別に日記に付けてる少年の漫画とか在ったな。

「そういえば、今日面白いことがあったんだよー。今朝トイレに入ってたらさー……」

ドサッ

何かが落ちる音がした。――それは楽しそうに笑う二人の後ろから聞こえてきた。急いで振り向けば、そこにはうつ伏せに倒れる桂磨の姿があった……。

倒れた？　転けた？　まさかクールビュティーで知られる桂磨に限ってそんなことは……、否、でもずっと携帯弄りっ放しだったし、眠そうにしてたし、意外と抜けてるとこあるから……。取り敢えず

笑った方が良いのかな？　見なかった事にした方が良いのかな？
それとも、無言で起こしてあげた方が良いか？

兎に角ここにいる全員が、何があったのか分からずに混乱していたのだ。もう十五年同じ時を過ごして来た真紀之でさえ、兄のこんな姿は見た記憶がない。見たことがあったとしても、それを忘れるくらい珍しいことなのだ。英和と真紀之がそれぞれにそんなことを思考していた時間は、長いようで短かった。否（いや）、本当に長かったのかも知れない。

「……何、アレ」

ふと、真紀之が倒れている桂磨の足下を指差した。見ると、丁度外灯で照らされている筈のそこが、真っ黒だった。丸い……穴みたいだった。

桂磨も無言でむくりと起き上がり、確認する。

その穴が少しずつ誇大化を始めていることに逸早く気付いた英和だけが、直感で理解した。その穴は可笑しい、と。

だが、それがもう遅いのだと気付かされるのは次の瞬間だった。

――

「うわあっ」

突然桂磨の体が滑り落ち、それに呼応するように反射的に叫んだ。ここはコンクリートで舗装された地面であるから、落ちるという表現の仕方は間違っていると思われるだろうが、その瞬間を直に見た英和と真紀之にはそうにしか思えなかった。勿論、当の本人もだ。

「桂磨っ」

「お兄ちゃーん！」

桂磨の叫び声に咄嗟（とっさ）に駆け寄り、腕を掴む。掴んでみると、それは落ちてるというよりも、誰かに引っ張られてるといった方が的確

のような気がした。
もう既に桂磨の下半身は黒い穴に埋まっており、踏ん張っている二人の足も幾分地面にめり込んでしまっている。
――結果だけを言えば、英和と真紀之の二人合わせても敵わない程の力で、三人は黒い穴へと引っ張り込まれた。
「うわー」か、「ぎゃー」か、「いやー」かはもう忘れたが、兎に角三人の「あー」という叫び声が重なったのは一瞬で、その内の一人が直ぐに叫ぶことの無意味さに気付き他の二人もいつしか止めた。

桂磨の隣には、彼の腕を掴んだままスカートを必至に押さえている妹の姿がある。――押さえきれてないよ。横から黒いスパッツがチラチラと見えた。
英和は頭の後ろで手を組んで二人の上の方を潔く諦めて黙って落ちている。

……変な感触はない。普通に高いところから低いところへ落ちる感覚そのものだ。

そうして落ち始めてどの位の時が経ったのだろう。
――気付いたことがある。三人は唯単に落ちているだけではなさそうだ。体が熱くならないし、頭に血も上らない、気圧も特に地上と変わらない。……髪や鞄や制服が翻(ひるがえ)っていることで降下しているのは分かるが、多分そのスピードは常に一定に保たれていて、三人に危険が無い様になっているのだろう。例えるなら滑り台を滑っているみたいな……。
結局周りの風景が一面真っ黒から変化しないので、自身の感覚に頼るしかないのだが……。

そのまま三人一言も発せずに、何時の間にか眠りについていた。

――

１－１「召喚」（後書き）

作中で「カダフィ大佐は捕まっていない」とありますが、この小説の投稿直前に捕らえられた（亡くなられた）との発表がありました。今から小説の内容を書き換えるのに時間が掛かるため、そのままの文章で投稿いたします。
主人公が召喚されたのは、まだカダフィ大佐死亡との発表のがない時点での話だと思ってください。

「そういえば、今日面白いことがあったんだよー。今朝トイレに入ってたらさー……」
という文章は、「パンダヒーロー　ｖｅｒ．アンダーバー」での歌詞（？）から拝借いたしました。

1―2「空腹」

「きゃあああああ」

次の日、目覚めたのは少女の叫び声だった。――

男二人はその声で飛び起き、瞬時に眠りにつく前の事を頭に巡らす。確か、自分達は落下していたんだ、と。

――周りを見回す。前方には海、後方には森が広がっていた。手入れは全くされていない様子なので、どこかのリゾート地ではないのは明らかだ。感覚的には、数千m以上は落ちていたと思っていたのだが、特に体に異常はなく、普通に夜寝て朝起きただけの気分だ。

その思考を三秒と掛からず行った桂磨は、妹の声が聞こえた方へ顔を向ける。

「……なん、だ」

何かが在った、しかしソレが何かは瞬時には理解出来なかった。

――砂場に掘られた幾何学模様、その上に横たわる血塗(ちまみ)れの……男。

「お兄ちゃんっ」

「う、おえぇ」

真紀之が震えて抱きついて来て、英和が視界の隅で木に寄り掛かって嘔吐しているのが分かった。……もっと離れてやれ。

――桂磨は只、訳が分からず呆然としていた。

「……これ、何だと思う？」

英和が後ろを向いたまま呟いた。その声で我に返った桂磨もまた、

呟いた。

「……死体」

暫しの無言が訪れ、遺体から目を逸らしていた二人がゆっくりと向き直った。真紀之はまだ直接見れはしてないけれど、それでも現実に向き合おうと決めたようだ。

体には無数の傷が走り、足に矢が刺さりっ放し。死因はどう見ても、出血多量死だ。真っ青な髪に、瞳孔の開いた白い眼(まなこ)が空(くう)を見つめていた。

「俺達、さ……。やっぱり、すっげーファンタジックな事に巻き込まれてるんじゃね？……はは、無いか」

英和は自嘲気味に笑って桂磨の顔を見た。まだ長い付き合いではないが、こういう時は彼が一番頼りになると直感しているのだろう。

「こんな夢見たいな状況だと、一番それが現実的かもね」

自分でも支離滅裂なことを言っていると分かってはいるが、それしか選択肢が無いことも分かっていた。

「ここ、もしかして……異世界、なのか？」

「異国であるのは間違いないね」

桂磨は一度眼鏡を外して、ブレザーの袖で顔を拭うと、また眼鏡を掛け直した。

「真紀之、立てるか？」

「……大丈夫」

桂磨は真紀之の手を掴んでゆっくり立たし、自分は砂浜に転がっている荷物を拾うべくもう一度しゃがんだ。

三人の周りには教科書やノートがいくつか落ちていた。落ちる途

中で鞄から飛び出したのだろう。紙類は軽いわりに空気抵抗があるからな。
「荷物を持って。海沿いを歩いてみよう、取り敢えず人がいれば良いんだけど……」
そう言いながら落ちる時に離れ離れになっていた己の携帯を発掘し、砂を払いつつ開いた。――圏外。まあ、そうだろうな。これからのことも考えて電源を切った。
「携帯の電源は切っておいた方が良いね」
それを聞いた二人も各々の携帯を取り出し、一つのボタンを押した。

「それは良いけどよ、この……し、死体は、どうする？」
「……別にどうもしないけど？」

全ての荷物を拾い終えた桂磨は、それぞれの物をそれぞれの鞄へ分け入れ、英和へ一つの学生鞄を投げつけ後の二つは自分で持った。
「どうもしないって……あ、う……」
英和が何か言いたそうにして、口を閉じた。真紀之も目を地面に落としている。……きっとこの二人にとって、遺体をそのまま放置、なんてのは後味が悪いんだろうな。

「はあ、分かったよ。埋めるだけはしよう」
肩に掛けていた二人分の鞄をその場に降ろし、近くの砂を手で掘り返した。砂は比較的軟らかかったが、大人を一人埋めるとなると簡単にはいかないだろう。……気が重い。

「さっすが、けーちゃん！　話が分かるー」
「その呼び方はやめて」
英和も木陰から飛び出て砂を掘り返し始め、真紀之も少しずつながらも手伝っていた。

――腹、減ったなー……。

「はあ、はあ、はあ、はー……」

桂磨は今、バテていた。――

◆◆◆

「体力ねーな、お前。穴掘るぐらいそう動くもんでもないだろーに」

「手が痛いんだっ」

制服から分かるように、三人は学校帰りで学生鞄しか所持していない。勿論、スコップも軍手もなし。――素手で1m弱も掘れば元々細い桂磨の指がいかれそうになるのも無理はないだろう。

「よし、死体運ぼうか」

英和と桂磨が殆ど転がす様に遺体を穴に投げ入れた。遺体に対しての扱いが酷くないか？　という疑問は二人の頭には浮かばない。……二人とも、もう遺体に何も感じなくなったのかも知れない。

「つかさ、表現をもうちょっとオブラートに包まね？」

「何の表現？」

「…し、たい……って」

口もごりながら言った英和の言葉に、周りの砂を穴に戻している桂磨は心底興味無さそうに言い放った。

「じゃあ、死骸（しがい）。屍（かばね）。骸（むくろ）。……どれが良い？」

「なっ……全然オブラートじゃねー！　そんなんなら死体のがマシだーっ！」

「ぷっ、そうだろうね」
大体、死体をオブラートに包む表現の仕方なんて、本当に在るのなら教えてほしい。精々、亡骸(なきがら)くらいか？
ムキになる英和を馬鹿にするように笑う桂磨は、穴を埋め終えたのか海の水で手を洗っている。掘るのと違って、埋めるのは簡単だ。
「お兄ちゃんっ、先輩っ。川在ったよー！」

真紀之が遠くから手を振って走って来る。彼女には食べられそうな実や、真水の川を探してもらっていたのだ。――学校に持って行ってた水筒も三人中二人（英和と真紀之）が空(から)の今、真水はとっても大切だからね。
海で手は洗えても、流石に飲めないからなー。と頭を整理しつつ、荷物を持って近くまで来た真紀之の元へと駆け寄る。

「ありがと、真紀之。早速行こうか」
「うん」
「ああ」

……と、その前に。桂磨はクルっと方向転換し、少し盛り上がった砂へ向き直る。ゆっくり目を閉じ、思いを馳(は)せた。

もし、これが良くある異世界召喚ものなら、アンタが召喚者かな？　見たいＴＶ番組とか色々あったんだけどねー。まあ、そんなことは今はどうでも良いんだ。もし本当にアンタが俺達を――否(いや)、俺をこの場に召喚(飛ばして)してくれたのなら、……感謝するよ、ありがとう。
俺は今、この状況をとても楽しんでいる、とてもね。こんな面白いこと、一生味わえないと思っていたから。――アンタが何者かも、どうして俺を召喚したのかも、何が好きなのかも分からないけど、思い立ったらそのうち、何か美味しい物を持ってくるよ。

この先何が待っているかは想像も出来ないけれど、アンタはずっと俺の恩人さ。

「……おやすみ」

目を開け、背を向ける。

「さあ、行こうか」

その時桂磨は生まれてからもうすぐ十七年になる中で、一番楽しそうな顔をしていたという。

◆◆◆

「それで、これからどうする」

真紀之が川の水を水筒で掬(すく)いながら誰にともなく呟いた。ちなみに、食べられそうな木の実は見つからなかったという。

「んまー、人を探すしかねーだろぉわな」

木に凭(もた)れ掛かり、頭の後ろで手を組んでいる英和が言った。その頭の後ろで手を組むのは癖なのか？

「人は人でも悪い人じゃなきゃね…」

桂磨は自分の鞄を漁(あさ)り、使えそうなものがないか確認している様だ。

「そりゃそうだな。……こんなとこで話してても埒(らち)明かんし、日が暮れる前に探し行こうぜ」

「大丈夫」

「何が？」

そう言って桂磨が鞄から取り出したものは……。

――ま、まさか！　その鞄は青い狸のポケットだとでもいうのか

っ！？

チャララッチャラ～♪

「懐中電灯持ってる」

「「……」」

「いや。おう、まあ……良いけどよ」

「何で持ってんだよ」

「何で持ってるの」

英和と真紀之の呆れた口調と怪訝な表情が重なったのを見届けて、桂磨は懐中電灯を鞄に仕舞いながら立ち上がり、口を開いた。

「じゃあ、適当に川沿いを歩いてみようか」

――何も無かったかのように。

◆◆◆

三人は舗装されていない獣道を川の上流に向かって只管（ひたすら）歩いていた。

遺体を埋め終えた時に丁度真上に位置していた太陽は、とっくに傾いている。どれ程歩いたか分からないが、忍耐強く今の今迄黙々と歩いていた三人が、そろそろ不満を口に漏らし始める位には疲労が溜まっていた。

「ちょい、上（のぼ）り過ぎじゃね？　このまま行くと山しかねーべ」

真っ先に糸が切れたのは英和だった。先頭を歩いていた彼の足が止まったのを合図に、他二人も停止した。

「ですね。はあ、はあ、ちょっと休憩しましょう、よ」
真紀之は途切れ途切れに自分の意見を主張しながら、既に座り込んでいる。桂磨もまた、先を行く気がない二人を確認すると、真紀之の隣に座って水筒の水を飲んでいる。

「やばいね、このままじゃ崖フラグだ」
「崖？」
水分補給をして一息ついた桂磨の言葉に、真紀之が首を傾げる。
「地面と水面の差が開き過ぎている。多分この先に道はないよ、どこかで途切れている可能性が高い」
「何だよそれー、こっちはハズレだってことかあ！？」
「……多分、ね」
「嘘ぉー」

この川を上っている途中、川は二手に別れていたのだ。結局意見が纏(まと)まらず、木の棒を立てて倒れた方に進むと決めて、今に至る。

「こればっかりは運だからね、どうしようも無いよ」
桂磨が苦笑して腕時計を確認した。日本とこの国が同じ時間軸で廻っているなら今は１５時１０分のようだ。
「２０分だけ休憩しようか」
そう言って鞄から取り出したものは――

「チョコだとっ！？」

――そう。一枚の板チョコレートだった。
読者の皆様は忘れているかも知れないが、三人はハンバーガー以降何も食べていない。……もう一度言おう。三人は、昨日の夜――約１８時間前――から、水以外何も腹にいれていないのだ。
そんな彼等にとって、それはもう、ブランド物の布に挿(はさ)まれた福

澤諭吉の紙よりも、高価なものに思えただろう。
「桂磨！　何故そんなものを貴様が持っている！　其処へ直れえぇ！」
「お兄ちゃん、ズルいよっ」
「……落ち着け」
「何をぅっ、我は常時冷静であるわー！」
「いいから落ち着けって。でなきゃ――」
英和が何故微妙に武士口調になったのかは放っておいて、板チョコを三等分に割って、その内一つを声を上げただけでしんどそうにしている真紀之に渡す。
「でなきゃチョコやらないよ？」
小気味好(よ)く自分の分のチョコを齧(かじ)った桂磨を、怨めしそうにしながらも静かに座った英和にもまた、チョコを渡した。
「二人がどうかは知らないけど、俺が持っている食料はこれで終りだ。今日の日付が変わるまでに、少なくとも人に出会わなければ……“死ぬ”、そう思った方が良い。――人は三日間飲まず食わずでも生き永らえるけれど、２４時間何も口にしなければこの獣道を歩いていく体力は無くなるからね。そうなればもう終りさ」
桂磨は二人の顔を見回し、続けた。
「それにさっきから色んな形の足跡がチラホラと見える。……草食なら、良いんだけどね？」
桂磨は笑った。――二人にはそれが、悪魔の笑みに見えたという。
「ちょっと恐がらせないでよー！　私がそういうの苦手だって知ってるでしょっ」

真紀之が桂磨の腕にしがみつき、涙目で訴えた。無論、悪魔に泣き落としなど通じる筈もないので……。
「緊張感が有った方が良いんだって。何に対しても疑って掛かった方が、いざとなった時に素早く対応出来るからねー」
「……恐怖心しか生まれてないんだけど」
「アハハ」
桂磨が愉快気に笑って時計を確認した。

「兎に角、今は貴重な時間を有効に活用してよ。俺は自分の為なら、例え兄妹やダチが倒れても迷わず先に進むから」

そうして桂磨は寝転がり、目を閉じた。
慣れている真紀之は別に何とも思っていないが、出会って一年と経っていない英和には、先程の桂磨の言葉は少々納得がいかなかった。……まあ、そのことを直接口に出すような真似はしなのだが。

1―2「空腹」（後書き）

「スモール（ビック）ライトと懐中電灯って似てるよね」という話から作中のあの表現法に至りました。あの部分だけ無駄に楽しんで書いたw

誤字・脱字など、ご報告くださると有り難いです。
その他、ストーリー展開上の意見などは受け付けておりませんのでご承知ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7804x/

正義の独裁者～異世界人による国政～

2011年10月21日02時05分発行